

鶴来中学校卒業文集

第16期卒業生

昭和41年3月18日



「中学の卒業文集って？」

全く記憶のない文集を「早瀬克人氏」が保存していた。その文集を小山誠一氏が全て写真に収めたものを編集した。

今はパソコン等、便利な印刷機能があり、簡単に作成できると思うが、当時はガリ版印刷で、編集において先生方の努力は並大抵ではなかったかと想像できる。投稿者は限られた人々かもしれないが、当時を思いながら読んでみて下さい。

尚、文集のスタイルを継承し記載したが、便宜上若干変更した。



燈台

僕は燈台のように生きたい

朝

日が昇るとともに明かりを消す

任務を終えた人のように

昼

燈台の休憩だ

海辺にどしりと立っている燈台

何事にも動ぜぬようだ

夜

活動している燈台

燈台の本当の姿だ

尊い人命を守るために

今日も

明日も

燈台は働く力の及ぶかぎり

僕は燈台のように生きたい 燈台のように



小山 誠一



目次

卒業生に贈る・・・・・・・・・・・・・・・・三

 巣立つ者へ・・・・・・・・・・・・・・・・四

 三カ年の歩み・・・・・・・・・・・・七

 一組 巣立つ一声・・・・・・・・二二

 二組 私のつかんだ真理・・・・三九

 三組 探りあてた鉦脈・・・・・・・・四六

 四組 苦難を越える意思・・・・五五

 五組 社会への窓・・・・・・・・六八

 職員名簿・・・・・・・・八三

 同級生名簿・・・・・・・・八四

巣立つ者へ



北川 与孝 先生

美しい心とよく考える頭とたくましい身体とそして正しく強い意志と行動力をみなさんのものにしてください。



松田 亀次 先生

昨日を忘れ明日を生かせ



角田 政一 先生

人生はまえもして練習する日々はできないし、やり直してもできない一回きりの劇である。



（ヒロセ）
今日の一日は劇の一日であり君はその劇の主人公である。

悔いのない善い劇を永く続けて下さい。



森 又蔵 先生

ウサギとかめ、かめは努で勝った。



早瀬 捨三 先生

人生はウサギとびでなくかめのように一歩々々前進せよ

読書をして広い視野と深い知識をもつことが大切 軽はずみな行動をしたり、他人に迷惑をかけないためにも「いや、いや、それよりも人生に対する喜びとゆとりをもつために



香城 哲隆 先生

「水よく石を穿つ」努力精進を望みます。



村本 平順 先生

深い知性、豊かな情操、力強い実践力を求めて人生を生きついで。



木田 卓 先生

まず健康
自己の信ずる道を、つき進みます。



太田 実 先生

誠実に生きる日々は、むずかしいのだが、誠実を求めて、生きるのみです。



竹田 邦彦 先生

Of all the blessings God can give,
To have friends is the sweetest and the best.

外誘惑に陥らず、内欲望を制す



村本 卓郎 先生

どんな小さなことでも、ホンキでやる人になつてください



窪田 長一 先生

希望に向かって一路邁進せよ



稲垣 武雄 先生

己唯足りざるを知る
とこの言葉のように日々努力して精進してください。



紺谷 洋子 先生

平和を望みます。しかし戦いを望むならば、自分自身への戦いを望みます。



吉岡 勇 先生

人間の限界まで試みよ



村上 文雄 先生

任運騰々にんうんとうとう



石田 佑子 先生

境遇に従いながらも出来る限りの努力をすると、自ら運命が開けて来るという言葉です。

自然に逆らわず、しかし常に努力を忘れずに素晴らしい人生を切りひらいて行ってください。



数沢 亮 先生

ありふれた言葉ですが、どうか、自分を大事にしてください。自分を大事にできないで、どうして他の人を大事にできるでしょうか。



杉村 芳夫 先生

清く明るく元気で御活躍ください。



松枝 昌子 先生

目の前の小さな現象に目を奪われず、遠い将来を見通して頑張りなさい。



永山外美子 先生

俺は人間様だ
 腹がへつたらへつた言
 いやな言は いやだよ言
 おかしかったら 笑おう
 うそはうそ まちがいはまちがいだと言
 腹が立つたら 本気で怒ろう
 泣きたかったら アンアン
 泣こう
 俺は人間様だ
 だから おれは 考える
 どうしたら 腹いっぱいになるかと
 なぜ 嘘がほんとと信じ 考えるのかと
 なにを怒り なにに悲しんだらいいかと
 おれたちはみんな 考える
 そしてみんなで 前へ進むんだ
 さあ 進んだ
 人間のお通りだ

この詩を卒業生に送ります。どこのだれが作ったかもわかりませんが、何か魅力のある詩です。



南 俊治 先生

苦しみをのりこえて、はじめて喜びがやってくる。
 百倍、千倍になつて！

その時、苦しみをさけた者は、後で百倍も千倍も苦しまなければならぬ。



建部 守弥 先生

一歩 一歩 大地をふみしめて前進せよ



池田 恒 先生

橋の下に住もうが、マンションに住もうが
 土方になろうが、社長の椅子に座ろうが
 ベトナムに渡ろうが、宇宙を散歩しようが
 そんなことはかまわない。
 なんになつても 進んでいこう
 若者の誇りと 若者の偉力の上に
 不屈の根性とたくましい体力を武器に
 最後まで はげみぬくこと
 これこそ 最も美しい人間の姿です。
 その姿に生きぬくところに 人生最大の妙味があるのです。
 とにかく健康で悔いのない日々を過ごしてくれ！

三ヶ年の歩み 一年生(昭和三八年年度)

月日	事項	思い出
四・五	入学式	いよいよ中学生の仲間入りかと思つてか、恥ずかしくてか、どの生徒の顔も真っ赤。
四・十六	身体検査 校医内診	今でもこの行事はちよつとはずかしいな。
十九	三年生修学旅行へ出発	「早く行きたい」そう思ったものである。
五・四	マラソン選手激励会	激励会とはどんなものかという好奇心で拍手したようである。構内でのきき事か、どれもこれも皆すばらしくみえたが、この時、その時の苦事、苦手な体育ではあるが、いじょうけんめいした。
五・二六	白山さん写生大会	「中学生らしい絵をかこう」とまあよくばつたものである。
五・一〇	中間テスト始まる	この日から中間テストが始まった。どのような問題がくばられるのかと、それはもうドキドキしたものだ。
六・一〇	校内陸上競技大会	「フレッツ・フレッツ」一年〇種とばかり大声でさげんだから声がでなくなつた。
六・二二	ヘリコプター着陸	二年生二人がのせてもらった。
六・二六	郡陸上競技大会	我が鶴中のためならば、と声をかざりに応援。
六・一八	新製作座公演「どろかぶら」観賞	この時の感げきは今でも忘れられない。
六・二〇	プール開き	(ちよつとオバーバーかな?)
六・二六	文部省一斉学力テスト	水は冷たかつた。
六・二七	校内角力大会	どの問題もずいぶんとむずかしくみえたが、やつてみるとそんなにない。
七・一	郡体出場選手激励会	三年生の選手の体がすごく大きくみえてしかなかった。
七・二	郡体育デー野球大会が本校で	三年になつたら私も〇〇郡大会に出たいなと思つた。
七・一三	期末テスト開始	全員野球が気になつて、勉強なんかあつまわし、という状態である。
七・二六	夏休み始まる	中学とは、なんとよくテストをするのだらう。(今からみれば、それはどうでもないのだらう。)
八・三	県大始まる	「どんなううにして、一か月を過ごそうか。(楽しくてしかたがなかつた時代の事である。)
八・六	県大で野球クラブが優勝	「ぼく達の学校は、県で一番なんだ。」そうだれかに言いたかつた。「君達の学校、県で一番だつて」と言つてもらいたかつた。
九・二六	運動会	行進の時、先生方の前を通るのが恥ずかしくて、恥ずかしくて。
一〇・五	マラソン大会	苦しんで苦しんで死めのか等々、ずいぶん才バてな事を考へたりしたが、最後まで物事をやりとおすというのすばらしさをおしえられたような気がする。
一〇・二二	創立記念日 学芸会	「中学の学芸会とは、どんなすばらしいものだらう?」と思つたが、がっかり。
一〇・二一	遠足(能美山方面)	足が棒のようになった。

一年生(昭和三九年年度)

月日	事項	思い出
四・一	離任式	森下・小石・蔵・庭田・山崎の各先生が転任していかれた。もつとこの学校にいてほしかった。
四・六	入学式	新入生が、ずいぶん小さく、又かわいくみえたものだ。(自分たちも去年は、こうだつたのかと思う。)
四・八	身体検査	去年(つまり一年の時)より、どれだけのびたか、たのしみだつた。
四・一四	中京方面修学旅行	楽しみにしていた旅行が、こんなに早くきてしまつては、もつとたいたと思つた。結果はまさか、そのとおり。あまりに楽しすぎて三日間という期間が、何だか一日のように思えたのである。
四・二二	学年写真撮影	どんな顔をしてるだらうと写真をみたら、太陽の光がまぶしくてか顔をくしゃくしゃにしていた。というように失敗もあつた。
五・一二	植林作業	一年の時とは、作業をする所が割合あつたが、今年するところは、大変急であつた。女子生徒が五・六人山の上の方にのぼつていて、ひやひやしたのは記憶に新しいのではないだらうか。
六・一七	中学校陸上競技大会	今年はずいぶん私達のクラスの人に優勝を、とだれもがそう思つた。応援しただらうが結果はどうなつたであらうか。
六・二三	文部省学力テスト	今年は何もなれなかつた。
七・五	中体連総合体育大会	自転車でも応援にかけつけた。
七・二七	海水浴	中学三年間で一回しか行かない行事である。その日の疲れとなつてあらわれた。もうゴリである。
八・二一	県旗旗り	吾輩の作品はどこに? すみの方に置いてあつた。
九・二	夏休み作品展	一生懸命さがすつと、すみの方に置いてあつた。
九・三〇	聖火リレー	これを見のがしたのが、今でもくやまれる。力いっぱい、顔、し顔。
一〇・一	運動会	一年生の時、望んでいたのが実現できたのであるが成績はいかに……?
一〇・四	新人陸上競技大会	先妻諸君のみことなブレにただただ感心させられたもの。おそれいりました。
一〇・三〇	二期中間テスト	信号を早く歩くこと
一一・七	校内バレーボール大会	一番高く上がったのは、どなたの書初紙かな?
一一・九	交通教室	さすがに全校生徒、げんしゆくな気持ちで。私たちがいよいよ二年生になるのだ。しっかりしよう。と真剣に決意したはずなのだが、結果はどうであつただらうか?
一二・一三	期末テスト	
一・一四	左義長	
三・一七	卒業式	

月日	事項	思い出
一〇・一〇	オリンピックク始まる	毎日、学校から帰るとテレビにしがみついていた。日本が勝てる度に悪しく思ったものだ。学芸会は去年と同じ。だしものなので、つまらなかった。(～している人には悪いが)
一〇・二二	創立記念日学芸会	走っている人は、さぞ大変だろうな。
一〇・一六	遠足(福岡)	
一〇・三〇	新人駅伝大会	
一一・一一	町村合併十周年記念式典	
一一・一〇	校内バレーボール大会	「ワンの、ツの、ラスト」と大きな声が体育館にあふれていた。
一一・五	遊藝訓練	朝のホームの時から、クラスのみなが知っていたので、サイレンがなっててもニヤニヤしかあつたらどうなるだろう。
一・九	読書会	「どいて、どいて」といつの間にかつかりそう。来年は私達の番である。(現在私達は、その直前)
一・二八	スキー大会	出ている出ている先輩の名前、もう二年間も過ぎたのかと、いささか驚く。
三・一七	卒業式	
三・二〇	高校合格発表	
三・二四	終業式	

三年生(昭和四十年(庚))

月日	事項	思い出
四・二	離任式	山路・本田・村本恒夫・村本喜利久・喜多の各先生がかわられた。
四・五	新形式	角田・杉村・池田・石田の各先生があたりしく、こられたが、中でも若い先生は私達の兄さんみたいでうれしい。
四・一〇	三年身体検査	何へんも何へんも同じことを言われた。
四・二三	修学旅行事前教育	出発する時間が朝早かつたので外は異つ暗。それで母に送ってもらつた。
四・二九	修学旅行出発	旅行中に変なうわさがたつたので、二年生の時ほど手ばなしでは喜べない。
五・二	修学旅行帰校	多い人は虫歯が十七本もあつたそうである。作業が男子と女子の努力でうまく運んだので楽しかった。ものごとすべてこのように、はんだらよいのであるが。
五・一四	歯牙検査	
五・二〇	植林作業	
五・二五	校内陸上競技大会	係りにはなかつたが
六・一四	地区別生徒会	昨年には限いでられなかつたが、ことしこそが
六・二六	郡中体連野球予選	んばつてほしいと願う。
七・九	期末テスト始まる	
七・一八	野球決勝戦	おもしろいところで、松任中に敗れた。
七・二二	郡生徒連絡会	くやくして、くやくして
七・二八	郡水泳大会	どの中学校の生徒もすっかりしているように思われた。特に松任中学の女子の生徒の発言には驚かされたものである。

月日	事項	思い出
八・二〇	県旗旗り	
九・五	夏休み作品展	
九・二二	運動会	この夏にレリース編みが大はやり、おかげで生徒の作品もレリース編みだらう。中学生生活最後の運動会だから思いきり進んでやろうと思つたら、おあいにくさま、あなたは、役員にえらばれていました。
一〇・六	新人野球決勝(本校優勝)	これが団体だった、ふとそう思う。
一〇・九	学方コレクション見	昼食前に行ったのが悪かつた。全員、パスによつてしまつたのである。おまけに私などは、さんざんな「考える人」をみおとすしだいで、一日に二つの行事とは、欲ばつたものである。
一〇・二二	創立記念日	
一〇・二四	県も軽飛行機飛翔大	夏休みに考えていた構図で図を書いたのだが、ではあまりよくなかつた。
一〇・二九	校内写生大会	日ごろの成果を今こそ。といきんで舞台へ上つたのだが、どうしたことか、あがつてしまひ、声が出ているのやら、でいていなやら、ひどい目にあつた。
一一・一四	音楽コンクール	この日のための練習で「クラスのまじり」が問題になり、それを解決すべく話合が行われた。そのせいかわがクラスは男女とも優勝。うれしいかぎりである。
一一・一六	校内バレーボール大会	就職するともだちががんばつてくださいな。
一一・三	正しい勤労観をもつ	いつまでも残るのだから、と全員一番上等のよそゆきの顔(?)でパチリ
一二・一六	卒業記念写真撮影	
一二・二五	休みに入る	一枚四円の紙を使い、エイツとばかり。なかなか思うように書けないものだ。
一・八	書初読書会	折角苦心して書いたのに、と少し惜しいような気がする。
一・二三	左義長	
一・二七	校内スキー大会	参加できスキー場のあちこちに例のおぼろが出た。やつたのだけは、なみかどめてほしい一生懸命
二・一	私立高校入試はじまる	「いよいよ来たか」そう思つたものだ。
二・一	期末テスト始まる	中学最後のテストだから、がんばつた。しかし成績は、騎士がしいから言わずにおこう。
二・一六	校内バスケット決勝	三年の男子のフレはともみごとであつた。もう一度みたいような気がする。
二・一八	公立高校願書切	最後の決定をくだす時がきたのだ。しかし、中には、なかなか決まらないうものもいたよう
三・一四	高校入試	だ、この試験で自分の一生が決まるのだと思え
三・一八	卒業式	ば、何が何でも、がんばらなくてはならないのである。
三・一八	卒業式	「さらば、さらば、わが友」という、歌もあつた。さあ、先生方、下級生、何もかも離れてい
三・二八	公立高校合格発表	かねばならないのである。そしてこの瞬間で、我が三年間の歩みも終りを告げたのである。

記・5年組



柿小柄子

三年間の回想

またたく間に過ぎ去った三年間、今しずかにふりかえってみると、次々といろいろな思い出が湧いてくる。緊張して名前の呼ばれるのを待った入学式の情景がありありと目の前にうかんで来る。クラブ、修学旅行、テスト――

中学生活

三組



藤場真理子

昭和三十八年四月五日きょうは、私たちが待っていた中学生活の始めの日である。

校門に入ると、玄関で受け付けの人たちが、私たちにいろいろ親切にしてくれた。

教室へいくと、顔も名前も知らない人が大ぜいいた。

ロッカーのすみのほうで、4・5人集まっていたので、近くへ行くと、私の友達だった。そして私も、話にくわわっているうちに、ベルがなったので教室へ入った。

まもなく、先生が、入ってきた。

その先生は小さいけれど色は黒くてたくましそうだった。それだ、いわゆる顔をしていたので、私は恐ろしかった。

それから先生は、こうおっしゃった。

「あんまりシーンとしているので、だれも来ておらんかと思つた。」と。

私は、その言葉ですこし緊張がほぐれた。今度は自己紹介で男の一番から、ずーといって、私も終わって、向田さんの番がきた。向田さんは鶴来でないのに「鶴来」と言った。

どうして鶴来と口から出たかと言つくと、向田さんの前、4・5人が鶴来出身なので、たぶん、知られて、いつたのであろう。翌日になった。

いよいよ今日から、授業が始まる。

そして、なん日かたつて、すこし、友達と親しくなった。

それから、運動会、遠足、校内競技、クラブ、いろいろたのしいことがあつた。

でも、修学旅行が、一年生だけなので、残念だった。

昭和三十九年、いよいよ修学旅行のある二年生になった。

友達も、二年生の三分の二くらいの人と仲よくなった。

四月のある日、まだうすくらい朝二年生が講堂に集まつ

た。みんなみおくりの人たちといっしょだった。私の父母もきていた。

今日は修学旅行の日である。

二泊三日の予定で、名古屋などいろいろなところを、回ってきた。

修学旅行も終わつて、また一年のようじに、校内行事があつた。

昭和四十年四月五日、義務教育といこの年がきた。

そして私たちが、むかえられたように、一年生が講堂に入ってくる。

三年の始めの四月に、義務教育といこの修学旅行がきた。

京都で面会もあった。又奈良のドリームランドについて、二回乗物にのって遊んだ。

それから、奈良のドリームランドで寝るとき、一人に二ベットが与えられたが、さみしいので、私たちのへやの人はみんな二人で寝たり、夜おそくまで、おわいでいて先生にしかられたこともあった。

そのほかいろいろなことがあった。

宝塚や大阪など回った。

修行が終わった。

旅行が終わったらすべて作文5枚以上書けといったので、旅行の楽しかったことが、少し入った。

作文を書いて出すと、こんどは、テスト。

毎日テスト、テストでいやになる。

それだから三年生は、いやだ。

クラブのべんたいの日がきた。

私は、バスケットの試合に出場した。

私たちは、一ばんに、空間の試合を行った。

試合をしているうちに、×対×対の同点である。

もうすぐして試合が終わる。はやくなんとかしなげればと思っ
ているうちに、相手側にフリースローが、わたされたそのとき
私は、もうだめだと思った。

そして心のなかで、「はいらないで」と、なんともなんとも叫
んだ。

一回目、はいらなかった。

二回目、なげたと思ったら、もうリングには入っていたので
ある。

「一点何とかしなげれば」と思っつて自分たちのリングのほ
う球をもつていったとき、試合終わりのベルがなった。

つてもへやしかった。

「あゝ一点なのになんとも思っ

その時は、「あゝめめすねばよかった。」のときも「すね
ばよかった。」と、なんとも後悔した。

それから、何日かたつて、あゝとわただけで、卒業だろうかと、
と、カレンダーを見る。あと二カ月半しかない。

先生は、「あゝすすす」して、中学生生活も終わりだ。くいのない
生活をおくわつていった。

そのことは、わかっているけれどもついてもつきの日になると、
後悔する。

そしてあと二カ月のとき、進学、就職どつちかかと思え
た、私は、就職にきめた。

就職の人は、私のほか、だいたい四十人ほどである。

私は就職だから、これで学校生活が終わりなので、楽しく暮らしてきた。

それから一カ月、進学の人たちは、いまがーばん、大切なときだ。

いずれにしろみんな社会人になるときがくるのである。あと十年ほどたつと、みんなどんなになっているだろう。それはそうぞうでしかないだろう。

義務教育九年間、長いようでみじかい年数であった。

せめて、もう二年ほど義務教育が、あつたらなあと思う。卒業して社会人になることは、うれしい。でもその中はきびしいだろう。私みたいなものが、そんな世の中へ入られるだろうか。もしでれたとしても、つまへくんだらうか。それが心配なのだ。

でもまじめにやつていけば、なんとかなる。それよりきょうを、めしたを、くいのない生活を、おへんこうと思う。

ふりかえってみれば、みじかい年間だった。

「このあいだまで、トキめう生だったのに、今はトキめう生。今思い出すと、この三年間いろいろなことが、いろんなものになつて、私の心の思い出しになるだろう。」



三年間をふりかえってみて

一組



田中とよ子

三年間を言つて、長いように思われるが、すぐてしまつて、早いものだ。

一年生のころは、まだ学校になれないので、教室の人と話をするのは、小学校の時一緒だった子だけだった。入学した時は、毎日、小学校が中学校より、やはりいいなあ、と思ったものだ。年中の行も、小学校のころより、たへんになつた。でも、友人があまりいなかったもので、あまりおもしろいと言つてもなかつた。

二年生になると、もう学校にもなれてきた。そして友人もふえていった。クラス中のフンキキが、一年生のころよりも、ちがう。

友人が変わつたからか。と思う。そうかもしれないが、やはり少しちがう。学校になれて来たせいかもしれない。年中行事も一年生のころよりもおもしろい。二年生になつて一番うれしかったことは、旅行に行ったことだった。私は、あんな遠くへ行くのは、始めてだったので、始めての夜は、寝むれなかつた。年中行事は、たいいてい二位ばかりだった。木田先生が皮肉みたいてい、

「二位ばかりとらないうで、たまには一位とつたらどうだ。」
と言った。その時、ある子は、

「バスケット大会で、一位をとって見せる。」

と言ったが、バスケット大会の時、おしくも三位だった。二年生の終りの方になつてくると、みんな、

「三年生になると、受験で忙しいから、今からでも頑張ろう。」と、たいていの子は、勉強を熱心にし始めてきた時、わたしは二年生の終りのころから、もう受験の準備をしなければならぬのかな、と思つた。

三年に入ってから担任の先生は、香城先生に変わった。香城先生は、木田先生と同じく、いい先生だ。二年にもなると、毎年、不良のことで、問題になるが、今年は不良問題はなかった。やはりみんなが、三年は、中学の終りの年だから、りっぱに卒業しようと思つたせいかもしれない。

三年にもなつてくると、もう受験という言葉が出るようになってきた。私は、受験というのには、むずかしいけれど、夜遅くまで机にかけりついて、やらなければならぬのかな、と、前から思つてきた。受験という言葉が入ると、そうかもしれないが、私はまだ、そこまでいかない。まだ受験という言葉が、理解されてないからかもしれない。母と父が毎日、そんな気楽なことをしてはだめだ、と、言う。

最近、一年のころも、変わったな。と思う点は、ある。それは、一年のころも、少しいろいろ問題が深刻になつてく

ような、感じがする。でも、私はまだ、印象に残っているのは、二年と三年の時の、旅行だった。あの時は、学校の行事で一番楽しかった。



13の三年間

三組 本 咲子

中学校に入ってから、もう二年も過ぎた。もう少しすれば卒業。ほんとうにあつたという間だった。今から考えれば、何をしていたのかわからないくらいだ。でもこの13は絶対忘れない。それは、中学校に入つて始めたやつたダンスだ。無我夢中で覚えて練習して、二年になり始めて郡体に出してもうった。その時は、自分の試合になると、足がふるえ、胸がドキドキしてしかたがなかった。それに、「ああ、あの子たちきつてしまったわ。絶対だめやな。」と思つたりして、いろいろするほど気がつかつた。「わたしはどうしてこの感じが小キいんだらう。でっかい体に小さな気、ほんとにいいや」となる。「と、と、と、思ったものだ。でも試合がすむと、負けても、勝つても、気持ちがいい

いわわていやだったよ

四組



仲村 澄子

わたしは小学校一年の時、鶴来小学校へ転校してきた。

その後の教育はずっと鶴来で受けている。だから、初対面の

人は、だれもわたしは他県で生まれ育った事に気づかない。

そして、わたし自身、根っからの鶴来の子だと思ってる。

義務教育の九カ年の間には、楽しい事、苦しい事、嬉しい

ことなども数多くあった。

しかし、「一貫して行われる事の出来なかつた」という思い出が
ある。

今から、それをひっきりん。

ニツクネームというのを、聞「えはオジが、アダナについて

にがい経験を味わった人も少なくないと思う。

例外にもれず、わたしもその経験者の一人である。

小学生のいつ頃、だれに付けられたものか覚えてはいない。

が、その事が幼い心にも、大きな打撃であったことは確かである。

「黒ん坊」「電気なます」がそうである。わたしが色が黒い「

とは事実であるとして、又、神経質でおいつまひのもの、わたしの

性格そのものである。

負けん気が強く、アダナを言われるのを極度にきらいつ

いた。言われると何だかむしように腹が立った。それでついむ

きになり、それでなおのことからかわれるのだった。

そんな事が原因で、けんかもした。(すいぶんバカな事をした

もんだ。と今になって後悔の念をこくする)

アダナを言われない日を数えたほうが手つとり早いほどで

ある。女の子にいわれもした。

時には、「おまえの国はどこだ」「国入帰らんがか」「もしら子

や」といわれたこともあった。

あまりひどい言葉に「おはい」ともたびたびだった。

そして、幼いながらも、真剣に「もしら子かもいれない」と

考えたこともあった。岡山県で生まれたのかと確かめも

し、友達に母と似ているかどうかを尋ねました。

そして、自分が岡山で生まれ、実の母である「よ」を確かめて

自分で安心していたのである。今となつては笑いの種にもな

らないが、当時のわたしは、真剣そのものであったのである。

それ以来、わたしは気にしなくなったものの、アダナをいわ

れることは、やはりつらい。

いままでは、相手にいわれるたびに「アダナを言い返してい

た。が、今になり、わたしにもいわれていやなことがあるよう

に、わたしの言った言葉が、その人のいわれていやな「よ」なの

かもいれないと思つて下つた。

が、まわりの連中の感嘆したような眼を見るや、それも帳消しとなった。

口論は長く続いたが、理屈では分のある、僕の方が、優勢で、よくも暴力はふるわなかった。

その後で、家に帰る途中、A君は、「おまん、勇気あるなあ、僕やったらとてもあんなことできんやろな」といった。僕はたいていへんうれしかった。

しかし、僕は、みんなに尊敬され、A君にほめられるだけの人間だったろうか。僕のとした行動は、正しかったかもしれない。しかしその時の僕の考えは、見栄をはる、というところだけだったのだ。

この二年間、僕は「このでかき」をむねむねと努力した。しかし、そのたびたび「このでかき」は、僕の心にやきつき、はなれないやうになつた。

今でも、「このでかき」は、僕の心のかたすみに残っている。でも、見栄をはる「このでかき」をやめようという努力しているの、「この思い」も、あまり顔をださないやうになつた。ただ、見栄をはるようになった時に、出てきて、僕の心のもちうちとして、活やくしている。



あの日から二年

一組



酒井外志子

新しい制服を着て、新しいズックをはいて、新しい友達と並んで講堂にはいった時、「二年の先輩たちが講堂がわれんばかりの拍手をしてくれたときの感動は、今でも忘れぬ」といえない感激を心の中に深く残っています。そして、その時、日から中学生になったんだという実感がときめき、勉強も運動も共にがんばろうと何度か心の中をじぎやがた。

それが、田口がたつのは早いもので、このまじか二年たち、三年生になり、その二年生の回数もめめと一ヵ月たつたやうになりました。そして、「この三年間をふりかえってみる」と一番楽しく変化のあったのは、やはり二年生のときだった。修学旅行も二年生の時が一番思い出しに残っている。

二期の始めころだったと思うが、一年生の中、いつから急に親しくなつた上田さんとおある誤解から大げんかをしてしまった。私たちはいつでもどいどいしてしまつた。二年生のクラス編成のとき同じクラスになったときも他の友達は私たちをうらやましがつた。

けんかも時々したが、姉妹げんかのやうにすぐ仲よくなつた。家も近くなつたので、学校入りのくも帰るものもついでにだじ

たし、グループも同じだった。なのにこの日から、人が変わったように、今まであまり親しくなかった友達といっしょになつて歩くようになったのです。けんかをしたことがみんなにわかっつてしまい、あんなに仲良かったのと同じ。けんかをして一週間たったその日は理科室のそうじ当番だったので、私は一人で理科室へそうじをしにいっいたら半分ほどおわつていました。私はあわててぞうきんをとってきて床をふき始めたとき、安田さんがきて「外志ちゃんとお母さんとお枝ちゃんとお母さん来たがいな。」と言った。「あのあいだの懇談会に」れなかったのでもう母がへんかになつていた。上田さんの家もいっしょが悪くて「れなかったら」母と上田さんのお母さんがいっしょに来たらいい。

ホームの担任の村本喜利久先生が理科室へ案内していた。私は一人でバケツの水をすてて理科室へやりに入った。中にはいれないので外でまっていた。しばらくして戸があいて母たちが出てきた。母が「帰らんか」といったが「先に帰つて」といった。母が帰つた後バケツをおいて教室へいこうとした時喜利久先生によびとめられた。そして上田さんとけんかしたそうやけど原因何や」と聞いた。私はいいえなかつたので、だまって下をむいていた。先生は「いいえなかつたらいわんでもいいが、上田さんと話し合つて早く仲直りせなだめやぞ。」と言いい「あんまり一人の子とばかりと仲良しにならんとみ

んなともいっしょに仲良くしなければいかないか」と言うて教員室の方へ歩いて行つた。

私はその言葉に考えさせられた。

そしてその日から、一日たった日、上田さんが謝りにきた。私も謝つた。それから、私たちは、これまで以上に仲良しになつた。

親友とけんかしたときの気持ちは、先生にいられたときよりも、母にいられたときよりもさみしく悲しくなつてくるのを知つた。いいたい友と友の間にどんな糸が結びついていけるかなあと思つたときも何度かあつた。私はこの経験を大事に心の中にしまつておこうと思つた。

いっしょして月日がたつた今、入試が近づき、それが終わると卒業式。

悲しみと心配がまじつた今日だが、「これまでできてしまつた以上、全力をつくしてがんばるほかはないだろう。」

みんなが、りっぱな社会人になつたとき、会うこともあつたろう。その時、「この中学時代の思い出を語ろう」と思う。



pixta.jp - 5781909

中学三年間

五組



大崎 和夫

中学三年間……。今振り返って見ると、本当に長かった。その長い三年間に僕はなにをしたか、なんにもしていない。できなかった。やまじいと思ってもみんな中途で消えてしまっている。中学に入ったら毎日日記を書けるつもりで、二三日の日記帳を買ってきたのだが、自分の一も使わないうちにやめてしまった。文字どおり三日坊主だった。とにかく「まよも」に物事をやりとげた事はない。たぶん「友だちの ^{ペン}Message」わかって、ブラスバンドに入ったもの一カ月もたない内にやめてしまったことだ。なぜやめたか、今になって考えて見るのだがわからない。

でも友だちだけはたくさん作った。頭がよくて根気のある「J」で一致している「T君、M君、K君、F君。いつも僕とにらみあっていた「E君。あだ名でよび合っていた「Kさんたち。じき合いきれずにけんか別れをした「S君。みんな良かったなと思う友だちだらけだ。みんな僕から見ると物事を最後までキツチリとやりとげる人たちだ。

お互いに教えたり教えられたり、感化したり感化されたり、その中で僕なら僕という独特の特徴をもった人間が作られて行く。

その意味で僕は本当に良い友だちをもったなあと思う。しかし僕がはたしてその人たちの良い友だちであったかという自信がない。

考えてみると「J」にたくさんの親しい友だちを持ったという「J」は、やっぱり僕の心がふわふわしている感じがなただからだろという思い。

本を読むにしろして「二、三ページくらいならなんともないが、四、五百ページになると途中で読むのがいやになってくる。

最後まで読む「J」は読むのだがあつて思い出す「J」でも書いてあった「J」をわすれて思い出すせない。

それで僕を読んだ本はたいがい三百ページを「J」していない。僕のやった「J」でもまともな事は不良化防止の標語の入選だけだ。

実をいうとあれだつて、「ふざけ半分」に書いて出したもの。「J」の「J」になって、僕は「J」のまま、「J」のままの僕でいいんだろつか。もう少し変わった道はないんだろつか、というようなことを考えている。少し僕という人間が進歩したんだろつか。

確かに三年前よりも今の僕の方が進歩している。と、思っても、今から二年後の僕は今の僕よりも進歩するであろうというわけではない。と、思える。今の僕がきこえているのは、二年後の僕にはわかるだろうか。

三年後、そのまた三年後の僕。今の僕の考えと違う意味がわかって、その道にいけないだろうか。

わかるために、思いつく方法を試そうか。
それについて、二年間、お前のことがかりがつかめたい。と思っ。

次の三年間に、お前の手がかりをもらって、道をみきわめよう。と思っ。



中学二年間を振り返って

四組



加藤 治子

鏡の前で、何度も何度も制服を着て、「明日から中学生、明日から中学生」と胸おどろけしていたのも、もう中学生生活を終えようとしてくる。

小学校でできなかったことが、いよいよやることがある。思っていたように、考えて見ると、めまろしく思っているものが遠くかすんで見えてくる。こどもも中学生になってからなやみ、やがたへんたあ、り困った。

楽しい思い出よりもなやみやみや多き中学時代だった。

最もなやんだことは友達のことだった。

ほんとうにこの人という友達ができないためにいろいろな手段をとった。

文通もしてみたいし、紹介してもらった。だがどうしても真の友達にはなれなかった。一週間に一回くる手紙は最初のうちはおもしろかった。でも一年、一年半、二年となるとうとう出だしのことはさえずる浮かんできてなくなり、二年ちよつとついでにしか続かなかった。

いどこに紹介してもらった人も会った日だけはなごやかだ、これが本当の友達だろうかと思わせることもあった。

私はおぼえしていないが、母が言うには。「札幌が一番
 良かったと言っていた。市場に行くと札幌が大好きだと言っ
 てもいいわいた」と言っていたと言う。時々母からの話を
 聞かされると、はすかしいような、なつかしいような気持ちに
 なるのだ。市場の人も何を言っているのか、わからないとい
 うけれど、言っていることからは、何度か何回も何回も何回も
 聞いていたと言っているのだ。それもそれは、南から北へ、
 「ひびく飛び」なんだから。

札幌の「札幌」は、東京の「札幌」が大好きだといわれてい
 る。まあ、似たものだ。ただ「一番悪い」は「札幌」の最後
 「札幌」の「札幌」の「札幌」だ。「札幌」は「札幌」だ。た
 だ、札幌の地方の人が「札幌」を聞いたとき、自分が侮辱され
 ていると思ってもいい。札幌の町はきれいだった。大通公
 園は春になると、色とりどりの花が咲きみだれる。公園を囲
 む十円から六十円という値段をつけている。高いだけあって、
 やさばりおいて、雰囲気の良い。始めてこんな風景を見た
 時は、おどろいてしまった。「札幌の人って、マジキのような人ば
 かりだなあ」と。でも、六年間も「札幌」に住むと、札幌
 が「札幌」の町独特のものとなり、とても印象深いものとなっ
 ました。「札幌」の町で「一番悪い」と言えれば、ただでも「サ
 ン」の町で「一番悪い」が「札幌」だ。

「札幌」のラーメンは、油が浮いていて、特
 別な味だ。この辺のソバのようなラーメンとは、比べものにな
 らない。今はインスタントラーメンがたいへん普及している
 が、私はこんなラーメンは食べる気にはなれない。もし君達が
 この地に来て、ラーメンを食べたなら、こんなラーメンは食べ
 ることが出来ないだろう。

雪になると、全国にも有名な雪まつりが始まるのだ。いろ
 いろな所からこの雪まつりを見に来たたくさんの人々が来る。「こ
 んな状態だから、雪まつりを見に来たのではなく、人におそ
 れに来たようなものだ。」この時の自衛隊の働きは、たいへんな
 ものだ。山から町まで、トラック何十台とついで、たくさん雪
 を運んでくる。鶴来の端から端まで、長い長い幅が、学
 校の端から出光の油屋へ、長い長い長さだ。今年もそのように始ま
 る時分だ。

ああ、もう一度行って見たいなあ。



集立つ一声(一組)

粟田勇紀夫
最上の幸福は希望を持つことである。

織作 峰生
100%の正直を持つ者は初めて人々から正直者と呼ばれる

加藤 昭二
進まざるものは地歩を失う

北村 満
世間はカゴやジヤムからできていない

小西 末男
人は自分一人だけで生きて行くことはできない

小山 誠一
苦しむのもよい、なやむのもよい、しかし、それになじするむくいは必ずくることを信ずるのだ！

作田 竹一
努力に努力をかさねた人ほど成功する

高島 勇
発言するのに自信をもて

田中見太郎
戦う時には戦うそれが神に通ずる

土田 政明
私たちは「自然、時」との戦いである

常岡 進
校庭をとりまいているたくましい木々、その中にいる僕達もそんな姿でいなければいけない

中木戸英夫
僕達は闘わなければならぬ。人間の歴史を、オラに躍進させるために。一丸となつて闘わなければならぬ

中野 勝祥
波をのりきる舟は強くてたくましい

中村 久幸
われわれは勇氣のある人間になれば、なにことも恐れることはない

長森外喜夫
諸君、勇氣 勇氣
人間の最大の幸福は希望を有することである

根崎 明義
うごうごう

野村 実
悪に強ければ、善にも強い

橋本 成樹
人生とは心の戦いである

三國 仁司

人生とは、自分の力を信じたただひたすらに理想に向かつてすすむことだ。そこには近道、良い道はなく、いばらの道、岩だらけの道があるだけだ

村田 俊治
何事も三日坊主でやめるな。氣力を持つてすればできないことはない

室田美喜男
ねばりづよい盾は最後に勝利を得る

山田 晴夫
世界最大の恐慌……それは計画のない計画である

山本 章
人生は人間に与えられた最大のものである

谷口 誠二
人間は勉強と経験によつて進歩する

一鉄小百合
柳に飛びつく蛙のように

太田三千恵
健康は体の青信号、病氣は体の赤信号

岡田千香子
人は逆境にたえてこそ

はじめて生まれる

山の上を見たまえ。
梶 喜美子

一本杉は、一本だけでもしっかりと
大地に根をおろしている

北村 礼子
真剣になればできる。このいきおいを勉
強にむけよう

木滑由美子
人生は敵ばかりではない。君のまわり
を見よう。笑顔で見守ってくれる人
がどんなに居るか

木下 米子
あれもしよう。いれもしようと思った
だけで実行しなければ何もならない。
実行して、はじめて意義がある

車 真知子
いらじもおちいって

小坂千栄子
強い信念と責任をもつて物事を
やりとげよう
木田場洋子
他人の「じゃを」を言う前に自分を
ふりかえりてみる

酒井外志子
思いきり太陽の輝く世界で体を伸ばし
心にあることは全部叫びあげてしまっ
勇氣をもう

作田とし子
時は、一分一秒もむだにできない

谷口 康子
未来へつづく道とはどういふものか、そ
れをさがしながら私達は社会人となっ
ていくのだ

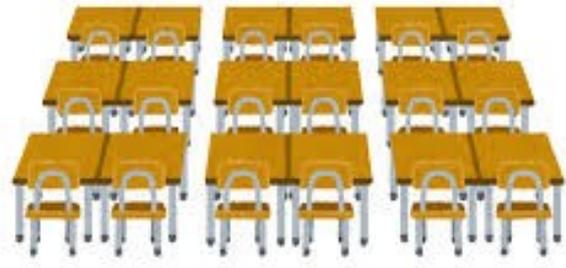
玉屋美知子
ふと思う、世の中はこれでいいのかと
中村 正江
明日があると思つて油断するな。今日
を充実させよう。そのためには計画を
たてよ

西田外喜子
まだ見ぬ未来に輝きの心を
わすれずに行こう

森 典子
一つの希望を失つても、きつていっかも
う一つの希望がやってくるのでしょ
山岸真知子
私たちは未来に生きる。だから前に進
むべきだと思つ

山本千恵子
希望を持つ。私たちには、まだ遠い未
来があるのだ

吉川 幸子
他の人々を自分の所においておくと
うことは、利己主義である。それを直す
この「じゃ」は努力のいる「じゃ」です
吉田 治枝
くいのない毎日をすごしたい



思い出しの学園生活

バレーボール大会

五組



本田 啓子

きびしい練習、優勝の喜び、クラブ活動は本当に身体と心を鍛えてくれた。修学旅行は中学生生活の中で永久に消えない印象を与えている。なつかしい私たちの学園生活……

二期期のバレーボール大会で二枚もの賞状が、男女一枚づつ、二組とも優勝。あの試合は苦しかったがそれだけに喜びも大きかった。予選はかったものの決勝がのこっている。

決勝は四組との対戦だ。

朝練習した時、サーブがはいらなくてこまっていたのが試合にもそのまま表れた。でも練習の時ケンカして、にくかったのでみんなで絶対に勝とうと約束してコートへ、試合は始まったが、五組はミスばかり、あと一点でチエンジ交たいの所まで来た。不運にもちようどわたしにサーブが回って来た。私達は五点くらい、相手は十四点、こんな時久美ちゃんの番ならなと思いつながらサーブ、一本目は予想どおり失敗、二本目、ワン、ツー、スリー、

ボールは私達の所へ返ってこない。

わたしはおどりあがるくらいうれしかった。二本、三本、なんとかみんなで同点までもちこんだ。しばらくしてチエンジコート、反対側に回った。五組は相変わらずサーブがはいらない。雨もポツリポツリ降り出した。

男子の試合も終わって、コートをとりにかこんだその時四組からとんできたおおきなサーブに、思わず手を出した。貴重な一点を取られた。さかんに「あせるな」「あせるな」と言っている。

男子も優勝したと言いつのに、私達もがん張らなければ、静江さんが「優勝したら焼きまんじゅう買ってやる」と言っていた。私達は、「竹田先生、きまえないし買ってへんわゆるや」といって「焼きまんじゅう、焼きまんじゅう」といながらがんばった。四組の前にボールがおちた時、前えいがうまく出来なかったので、久美ちゃんが小さくボールをおとしてくれた。のでぐんぐん点をあげた。

もう一、二点という所でなかなか進まない。ワン、ツー、スリー、まだだ、もういつかい、ワン、ツー、スリー、

「勝った」「勝った」

かんせいをあげてコートのまん中で喜びあった。

服も、手も、ズックもみんなどろんどろん。

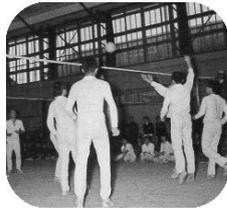
教室に帰ってああ優勝したんだなと思った。静江さんから「焼きまんじゅうつぞや」と言われてちよつとがっかりしたが、優勝の味だけがまんずることにした。

バレーボール大会のように、苦しい時があっても、試合の時のように、みんなではげまじあつていくのもいいのではないか。それから、たまにうそをついても、いいなと思った。



pixa.jp - 11611357

旅行記



五組



北村 光信

宝塚劇場「」で僕等は、三時間余り観劇した。そのはなやかさ、きれいな声は、今も覚えている。場内一ぱいに響くあの声は今も聞こえるようだ。ただ観劇している人の中で、やじる人がいたのが、気に入らなかつた。こんなやつはたまたまだせばいいのになあと思った。こんな人がいたのではまじめに観劇している人にめいわくだ。その中にも勇ましいのがいた。よつほどの馬鹿者らしい。あれだけの人の中でやるのだから、きつ

と心臓が大きいのだろう。全部女性だったと思う。女の人が長生きするのは、あたりまえだと思う。

それから、大阪へ向かって出発した。夜の大阪はきれいだった。ネオンサインの点滅、それは、金沢でも見ることが出来るが、それとは、ちがうように感ずる。大阪は、水の都だけに、ネオンのあかりが、水面に反射して見えるからそう感ずるのか、いずれにせよ、ちがうのに感じた。道頓堀あたりは、寒にきれいだつた。色々さまごまな、ネオンサインが目玉写つた。写真で見ると、きれいで、静かそうな夜景だが、ほんとうは、そつぞつ以上にやかましかった。

第一日は、明朗館で泊つた。「この人たちは、人が冷たく、いぼつていたように、思われる。香城先生にたずねてみると、大阪の人つて、みんなこんなんや、いつも待遇は悪いんだとおつしやつた。大崎君は、「たまたまきつぶしてしまえと言つていた。ぼくは、こんな所二度と来ない。絶対にこんな旅館に泊まるまいと思つたほどである。」

食事の時、二人に一つの食台がきた。なんてケチなのだろうと思つた。つまり相手から見ると、手数が省けるからなのだろう。

僕達の部屋は、地階で、まどから川が見えた。その川は、どぶくさくて、まどをあける気になれない。ぼくたちはまどをそばでねるこつになつた。ふとんのほこりがもうもうとして

いたので、まどをあけたら、気持ちがよくかった。ちよつとくへ
かった。大阪の夜は、やはり、北陸の夜より暑い。

「じぶんはー」「まどしめまめーん」と言う、おじつて、ものを
言うような声があった。消燈の時間がきて、二十分以上の時間
がすぎた。しゃべっている人がたくさんいたので、まどを、すべ
つと、全部あけてやった。しゃべっていたやつは、おっきの調子
で、おじりでした。知らん顔して、眠っていたら、又どなった。
「へんかつたら、だましてねるー」

「ねて静かになつたら、しめてやる。」と言つてやった。

(少し一方的だつたと思ひ。)

それから少しやかましかつたが、だんだん静かになってきた。
五組の人より、三組の人の方が、静かだった。

あくる朝、早く起きた。朝飯に生卵がでた。あとで聞いた
話だが、五組の林さんだつたと思つけど、四組の本橋君にそ
の卵をやつたらしい。その本人は、てっきり、ゆでたまごだつ
と思つて、ガツンとやつたらしい。そのあとは、わかるだらうつ
と思つ。本人はおじつていたらしい。

大阪城はすばらしいかつた。「こゝ来て、はじめて、大阪にい
るんだという、実感がわいてきた。天守閣にのぼると、すいび
ん高いんだなつと思つていたが、下から見ると、そう高くない
と思つ。ほんとうは高いんだ。理科の先生は、人間の目はいい
かげんなものだ、とおじつてやつたが、ぼくもそつと思つ。じ

大阪城の見学の時間があまりなかつたので、中を全部見て
くるわけにはいかなかつた。ほんとうに残念だつた。

十二時半ごろ、京都市に入つて、まっすぐ清水寺の方へ、行
た。あそこは秋はすばらしいぞつた。かえでが赤くなるから。
「懸外造りの高い舞台」とよく聞か、舞台を見てみると、あ
まり高くなかつた。音羽の滝で水をのもつかなと思つたがや
めた。あとで学生ガイドさんに聞いたんだがあの水は、上の
池から流れてくるらしい。のまないでよかつたと思つ。

京都市は、古都だけに、観光地が多い。

それからずーと、印象がすいので書かない。

金閣寺へやってきました。ぼくは「こゝへ、来るとたいへん、おちつ
いたおだやかな感じがした。木と水との調和がとれ、静かだ
いかにも平和な感じがした。また、そうじもゆきとどいて、き
れいだつた。京都市は、いいなあと思つ。伝統ある都、そうじつ
感じが、どことなく感ずる。

四時半ごろ、旅館に着いた。案外早く着いたものだ。「こゝは
大阪とちがつて、感じがよかつた。大阪で泊らなくて、京都で
二泊した方がよいと思つ。

まもなく、自由外出の時間が来た。あの通りは、人がたたく
ん通つていた。店の感じもよく、けつておしつけたりしなかつ
た。

いろいろまわつていろいろした、二時間たつた。部屋ではねる
したぐがしてあつたのですへねた。

夜中、目がさめた。表田君のまくらが、屋根の上にあった。なんとねぞうの悪いんだらう。

しばらくして、かし田君がいききをかきはじめた。ひどいびきで、鼻をつまんでやろうと思ったがやめた。昨日の橋場君のようなわけにはいかないと思ったからだ。あの時は、すく、いびきがとまった。

あくる日、その日は、前の日と同様、晴れていた。思い出多い京都をあとに、宇治の平等院とやってきました。写真だと前の方しか、見れないが、現場に行くと見るのと、まわりとあるすべてのものが、見える。また、その広さもわかる。写真で見たのと、目の見たのでは、全然感じもちがう。

十時ごろ、奈良へ着いた。奈良公園、東大寺、その大仏殿、春日大社、二月堂、三月堂、そこで、いろいろなものを見、そして、いろいろなことを聞いた。あまり、たぐやめなかったので、半分くらい忘れたと思う。われながらならなげかない。それから、法隆寺を見学し、古代文化を味わい、そのすばらしいことに、感激した。もたもたしているうちに、ドリームランドへ来た。そして遊んだ。近代工場を見学させなかったから、時間があまって、どうするにも、できなかつたんだらう。期待してたよりも、小さかったので、がっかりした。

夢のホテルへ入った。ほんとうに忙しい日でした。おりてのついで、おひるのついで、を何回かくりかえした。そして、歩いた距離も長くない。

修学旅行も、終わりに近づいた。中学生生活の楽しい旅行も、明日でおわるのです。何だかさみしい感じがした。二度と、こんな日は、こんな日は、こないだらう。人生において、別れるほどつらいものはないとよく聞か、ほんとうにそうだと思います。

あくる日、2日、さみしいような気持ちで、バスにのった。比叡山の、天ぼつ台は、実に気持ちよかつた。京都市、びわ湖が、きれいに見えた。晴れた日には、白山も見えるぞうだ。くいのない旅行だったと思う。知らない土地、見たことのない物、そして、いろいろなことを学んだ。



中学生の重大さ

四組



宮下 仁利

卒業式をまじかにして、中学生生活をふりかえってみると、「この重大な学園生活をいかに過ごして、きたか疑問がわく。勉強の面では、いろんなことを学んだが、それを自分のものにしたかいなかは疑問だ。

精神面では、自分が野球という規律のあるクラブで鍛えられた自分で鍛えたが、「この根性があらゆる面で、はつきりできない自分は、やっぱりまだ鍛えんがたりないのか、それとも自分が？」

野球部でいちばんいい練習のしているのは、せんぱいから、「野球はなんのためにする。」「と、とびな質問を浴びせられた時だ。自分も他の人たちも、その質問に対してももちろん「勝つこと」「優勝」が筆頭にあげた。……が、先輩は「ちがう、もちろん、カシロクト」があげられるが、それ以上に、社会人になるための立派な「プロガマエ」そしてリッパなタイトをヤシナウことが第一だ。」と強調された。

自分は「このことを半信半疑で心におき、そして自分は第一に勝つこと」を目標に置き、そして、そのかたわらに、先輩にいわれた「と、と」とめた。

今、あの時、先輩にいわれたたくさんの中で「このこと、もう一つ、野球は個人個人でやるものでない。……(単純なこと)ばで、意義も深いと思う。」「では、何人でやるものなんか？」と考えると「そりゃあ9人に決まっている。」「と、思ってた先輩の話を聞いていると、「9人でやるものでもない」「不思議だな9人に決まっている。」「……」「クラブ員全員でやるもんだ」と強調された。

「野球だけでない、あらゆる面で、「こんな」ことがいえる「こんな精神面がクラブや他のところで鍛えられる一番の段階が中学だ」と思う。

自分は「このことを一生忘れず努力し躍進する。」



クラブ活動

一組



小山 誠一

「フーッー」

「パチパチパチ。」

歓声、拍手のわきあがる。「小松の体育館。僕達卓球部は鶴来中学六〇〇の生徒の期待と応援のもとに、石川県卓球大会に出場した。」

二年前の二月、僕は、何の気もなく、ただそわわって卓球部にはいった。

それから毎日トレーニングの連続だった。

長距離走、短距離走、うさぎ飛び、フォームづくり、フットワーク、うで立てふせ、座禅など必要とおもわれるものは、ほとんどした。ひどくつらかった。その時分体の弱かった僕には、ひどすぎた。階段を上がれない日もあった。それでもトレーニングは、毎日続けられた。

球にも台にもそわわらずに終わる日もあった。

最初二十人いたのが、だんだんやめていった。僕もやめたくなった日がいく度あったかもしれない。毎日おこらわ、どなられの連続だ。舞台はしめきつてあるので、だれがいるのか又三年生の顔も名前も知らなかった。時々二年生が練習して

いるのを見るが、そのたびに、「僕もこれだけうまくになれるのかなあ。」と思った。

夏休みになった。トレーニングはますますつらくなった。シヤツは毎日かえなければならなかった。県体がすんだので、二年生が中心だった。クラブ中に二年生が水を飲むのを見て、僕は、影で文句をいいあった。学校の水が、でなくなつた。みんなあんまり、がっかりしなかった。が、ある日二年生が僕達を呼んだ。

「おい、一年ボー。」

みんな二年生の前にならんだ。

「だれかおぼさんのところについて、やかんかりていじ。」
だれかが、やかんをもってきた。

「おまんら、駅行って水くんでいじ。」

こんなことが、何日も続いた。

時々、トレーニングをしない日があった。そんな日は、クラブ中ずっと、球ひろいだった。

しかし、夏休みがおわつてからは、一年生もよく練習させてたつた。トレーニングも楽になり、僕は、だんだん上達していった。この時、一年生は七人いた。

二年に進学、後輩をどうあつかうか、みんな、互いに話し合ったが、結果は、去年と同じだった。(何のために今まで練習してきたのだ。バカヤロー。)と思ったが、だまっていた。

どなり、おこり、冗談をいれてのクラブだった。一年たった。

たものがあつた。(を)通つたが、昨夜の寝不足を補つたため、眠つていたので、「どこをどう通つたか、知らない。

大劇場へはいる前に、動物園、植物園を見学、公園があるときいていたが、こんなに大きいとは、三色スミシロの花壇、赤、黄、紫のチューリップ。「ワ、きれいな鶴来中学校にも、こんなにきれいな花壇が一枚でもあればな。

小雨の中を一時間ほど歩き回つて、大劇場の中へはいつた。男子の顔は、ほろろんで、今にもやぶれそうである。真赤なじゆうたん、天井には大きく、きれいなシャンデリア。壁には、大きな、女優さんの写真。何かしら、それだけで宝塚という所が女の人はかりのお城のような気がした。劇場内はテレビでみるより狭いよう思われた。やがて、模様のはいつた大きな幕、緞帳がゆつくりあがつた。

赤、青、緑(信号機みたい)のはなやかな衣装をつけた、オール女優が、歌い、そして、踊つた。舞台の下から花形女優が、歌いながら出てきた。胸を、あけた、すその長いひときわめだったドレスを着て。その長いすそにすい「まわていきそうな、柔らかな、ホワソとした気持だった。

どこからか、低音の魅力ある声が、きこえた。と同時に、男優、じゃない、男の衣装をつけた女優が現れた。「まるさん」すらつと長い足、又、白いスボンがイカス。まったくどこからみても、女の人だとは思えない。男なんていなくてもよい、て心境になる。又「マルサン、ガンバツテ」と声がかかった。よく聞いし

びなどで、若手歌手が歌っているのを、「キヤ、」と気遣い見たいになつて応援する女の人。その人たちの気持ちがわかるような気がした。

第一部がおわると、しばらく休憩して、第二部の劇、「リシエ」の鏡「これは、侯爵の令嬢と偽つて、社交界にはいつた夜の女を母と持った美しい娘の事を描いた物語でした。主役は第一部で、カツコイイ男役をした那智ワタル。ドレス姿も又、又、スバラシイ。歌や、珍しい踊りもはいつた劇だったが、中でも、那智ワタルが劇中でのせりふの中に、大阪弁をいれたのが一番印象的だった。

女のお城からでると、雨はあがつており、空腹が私を待つていた。旅館につくと、ほつとした。部屋の感じはテレビ付きでまあまあ。お便所もタイル張りできれいだったが、旅館の人はサービスが悪くて、突っけんどんとして、感じが悪かった。小さなサルみたいな顔した、おにいちゃんは、あつちちよろ、こつちちよろ、と部屋を回つてゐて、文句ばかりいつていた。全く感じの悪さ。夜、私達の部屋に二人の紳士がおいでになり、男女交際について、十二時近くまで話していました。その途中にも、あの小さなおにいちゃんが注意しにきました。朝です。きのうのうつとつしい天気とは別に、今日は快晴。朝ごはんのおかずは、焼きのり、くどいおすい物、それに生卵。十人の内、七人くらいが卵を残した。卵もお金がかかつているのだから、残すのはもつたいない。(みんな、よほど、旅館

の人がにくらしいといつので、新聞紙に包んで持つていくことにした。きょうは、たしか、大阪城で厚生ガイドさんと一緒にいるはず。どんな人かな。那智ワタルみたいに足がながければいいな。ハンサムならいいな。まとめて、カツコイイ人。

大阪城を見学した。エレベーター付きのお城。何となく「変なお城」。驚いた事といえば、ただもう、石垣の大きさに、びっくりしただけ。畳、六十枚くらい大きさというから。

学生が五人集まって話していた。きつと私達の学校のための学生ガイドさんにちがいない。柿さん、大崎さんと三人で、批評をはじめた。「ああ、あの人カツコイイ。こっちの人ハンサムだけど足短いわ」めがねかけてる人の横の人いいわ」

集合の合図があった。三人は笑いながら

「ジョージ、カツコイイ人が五組にきますよー」

あんがい感じのよい人だった。これから京都へむかって進行。所に伝わる伝説、又、その伝説に関する人物の歌った和歌などを歌ったり、はなしたり、二年生の時、学生ガイドがきらいだったので、今度も、ただ説明をきいていたが、いつのまにか、話にひかれ、一生懸命きいていた。

清水寺

音羽の滝でよい止めの薬をのんだ。右のといからおちてくる水で飲んだ。頭がよくなるというところである。

平安神宮 絵はがきでみるように本当に赤(朱色)だった。きれいだつた。

金閣

どんなにか、古めかしい、おごそかな建物かと思つたら、全然見当ちがいがい。まるでペンキで塗つたように、今にもはげそう。安っぽかつた。

これで二日目の日程がすみ、旅館についた。「きょうはんですた」。宿の人は、大阪に比べるとずーと感じがよかつた。あと二日。みんなと一緒に寝る時といえば今日の奈良だけだ。

東本願寺

毛綱の話が有名で、ガイドさんに、北陸にはたくさん信者がいて、髪を寄付したといわれたので得意になつた。毛綱は、すり切れて、これが毛綱だといわれて、ええっ、これがとびつりした。

平等院

いつもみなれているので、感じなかつた。でも、池に写っている影は、はじめて。平安神宮から、みると色がはげて、おんぼろ建物だつた。

今日で旅行はおしまいか。あつけない四日間だつた。奈良ドリームランドにあれほど来たかつたのに、期待はずれだつた。アメリカのものに比べると、ずいぶん小さい。又……にも乗りたかつたのに乗ることができなかつた。でも、モノレールにのつた時は、すいへ愉快だつた。一番前だと思つた所が、後

ろだったとは、動き出してはじめて、後ろに乗ったことがわかったのだから。

追加

第一日目の夜、宝塚を見て、すっかり那智ワタルのファンになった。白いズボンをはいていたので、トレパンをはいて気分を出したが、全然だめだった。

那 智 ワ タ ル



体育

五組



柿 小柄子

私は、体育が大きらい。小学校に入ってから一年くらいまでは、まだ普通の児童と同じくらいだった。ところが、二年くらいになると、とてつもない科目になってきた。いや、きらいというくらいないというくらい、走らなくても、しゃべりなさいのどきめをよび箱をよびせしてもよくとんぱないし、走らなくても、しゃべりなさいのどきめをよび箱をよびせしてもよくとんぱないし、結果にならなくて済んだのであります。

どうしてそんなふうになったのか？よく覚えていないが遺伝的なものもあると見た。

代々、私の家は体育がよくてできるという人はいなくなつたらしい。ただ、一人だけ、外茂ちゃん(本当は私のオバにあたるのだが、まだ若いので皆こうよぶ)がいた。特にテニスがよくできて、県大会から全国大会に出場したこともあるほど。しかし、この人は例外で、その他は全員右へならえ。だれ一人としてこのようにすべれた人はいらつしやらない。かりに、いっこ達をとり上げて、なげ悲しいまでの状態(中にはもちろん私も入つてのこと)、このように血縁を持つのだろうか、まあ無理のはいはす……。

中学に入ってからはいよいよこの問題が深刻になつてきた。体育の時間となるとそれはもう、身ぶるいがしたくらいである。(ちよつと、オーバー)

ところがどうしたわけか、私は中学時代にテニスクラブに入つてしまった。最初のうちは、二、三人友達が入っていたが、二年になると、その人たちは、クラブをやめてしまった。私もやめようかとまよつた。が、そこは意地っばりの私である。途中でやめることは、はすかしいらうと思つていたので、うとうとそのままクラブに残つていられることになった。

けれども、それは今の私にとっては、大変役だったのである。いや、役だったはずなのだ。というのはいの間の体育の時間、先生が「オネちゃんも、やつとみんなと同じ」ことができ

おろになったね」と言ってくれたのだ。そして、その人が言うことには、それはやはりテニスが役だったそうだ。うれしかった。今まで皆から、ばかりにされてきたが、これからは体育の面では、人並みにあつかってもらえるのだ。そう思うと何とも言えない気持ちになった。

通知だけでも、私は、体育だけがはなれていた。しかし、中学には、ありがたいこと、保健体育というものがあつて、その面である程度その成績をとりつければ、やはりはなげがらなかつたが……。

私は今、高校進学を目ざしている。とすると、やはりまだ体育というものが私についてまわっている。オジは「高校に入ってもテニスはやりなさい」と言っているが、今のところ、には、入る意思がない。他人は私に「あなたは、なぜ入らないの？テニスは役だったのじゃないの？」ときくと思う。私は、それに答えない。なぜかと言つても、ただで、私の気持ちはわかしてもらえないだろうし、又、それにあつて自分をこれ以上弱虫にしたくないから……つまり、私は体育がきらいなのである。



ほんのわずかの間に

二組



木滑 和代

空から、かけおちるように降っている雪。その雪をながめていると、いつかどこか入つてしまふような、不思議な気持ちになる。「夏の日の思い」なんてもんじゃないが、ほんの一月、いや、一週間ほど前のことだと思えない昔のことと思つて出つていった。

忘れものをして、立たされたこと、宿題をしていかなくかられたこと、又、授業中、ゆだんをしていて、質問され、あわてふためいたこと、あげるはまだだたらくさんあるが、なんだか頭に残っているのは、非ロマンチックなことばかり。

しかし、中には例外もある。これはロマンチックといえないかもしれないがその中で、特に頭に残っているのは、二年生のある日のことだ。

今では、私のとても仲の良い友達の一人だが、その友達をTさんとあぶらTさんと、ふとしたことから、けんかをしてしまった。私はかんたんに、あやまることがいやだったし、きくとTさんも、そうだったにちがいない。

「どうして、も、口なんかきくもんか。」

私のつかんだ真理(二組)

村上 一次

人間も社会も生きている。それらに立ちおくれぬようがんばろう

高田 太郎

努力すれば実となる

土谷 俊幸

大人になってもはずかしくないように

吉本 昇一

男はあたってへんだけ

松本 武夫

「やめろ」という気持ちをもつて

何事にも進め

戸田 順次

愛は愛せられる者に愛を惜しまず

岩田 昭義

荒波は岩を変える

尾島 和男

自分は社会のためにつくす努力をする

常山 輝夫

勉強するのは、眞の教養を身につけるためのものである。文化の交流と発展

のためのものである。結果はどうであらうとも出世のためのものではない

中村 広司

七転八起の言葉のように、失敗しても絶対あきらめるな

山田 孝則

友情は悲しみを半分にし

喜びを二倍にする

小石 満則

よい習慣にて、よい人間性を

織田 勇雄

力は正義なり

大西 増幸

計画あつて、実行あり

又村 定雄

自分の行動に責任を持つ人間になろう

谷端 万亨

立派な高校生、立派な社会人

駒井外茂吉

何事も計画を立てて

小西 秀信

夢、それは努力の源である

諸君大いに夢を持って！

辻 順正

わたしはいつも人生のまがりかどにきている。そして、それからぬけることも大変むずかしい

中田 光義

少年時代に楽観をもて

山崎 博樹

失敗したら努力によってもりかえそう

坂 美枝子

時計のふりこは言いました。

人間は時をわすれることはできないと

浦 洋子

人生を有意義に過ごそう

中田 幸子

反対の声も聞いて向上の道を開け

長田 和子

今日の仕事、明日入延ばすな

北村裕美子

一生涯やりぬく仕事をもて

山形 悦子

自分が正しいと考えた道なら

まじすべ歩いていこう

建部 泰子

青春時代はなやみをもて

それどころか勝負勇気を持って

南谷眞理子

なんでも最後までしたときは、

あとにきえることがなく気持ちがいい

畑 三穂子

いいものを感じし、悪いものまねをする。

それが自分である。悪いものまね

をする、自分を省みよ

富田 了

長所を伸ばしていけば短所は消える

山口 栄子

自分の仕事を見出した人は幸福だ

喜多美千代

木は雨がふっても、雪がふってもしらん

かおしている。自分も木のようにならな

りした心をもつていこう

村上眞理子

努力、根性、精神力

これにかなうものはない

中川ふみ子

いつまでも、希望とほほえみを

わすれずに

木滑 和代

自己の反省、そして何事も

グッとこらえる強い力を養おう

新宅美和子

食べ物もおいしく食べてこそ栄養になる

戸田 初枝

自分でこれときめた仕事を

最後までやりぬこう

松田 照代

一歩一歩明るい人世を歩んでいこう

西多由美子

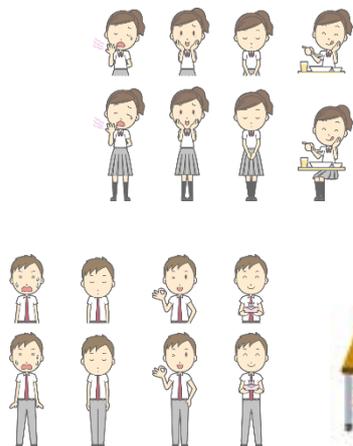
汝 自身を知れ

詠 明美

よき種はよき苗となりよき花が咲こう

藤本 詠子

自身を持ってそれが成功の第一歩である



二つの道

三年生になつてからは、就職と進学のこと、私たちの頭から離れるときがなかった。就職の人たちは二学期の末には、ほとんど就職がきまつている。進学の人は一부를除いて、三月十四日、十五日の公立試験が待つている。私達はいろいろな境遇から自分の運命をめぐまげり拓いてきたのである。



進学

一組



村上 一次

ぼくは、あまり進学については賛成ではなかった。がしかし社会のじようせいには許してはくれなかった。

第一に、母が、一次おまえは学校に行つて勉強する気がするのかわらないのか?と聞かれた。

その時はクラブをしていたし、あまり考えていなかったし、あいまいな返事をしておいた。

しかし、「こごと」はすんだわけではなかった。今度は、姉が、一次、いま時分の者は高校へへういといとらな……といつてきたが、これもあいまいな返事をしておいた。

だが、今となつては、そのまゝいかないが、「こごと」は前よりもはげしく、しく毎日聞かされたので、一応は進学にした。学校のこと、進学と言つたことになつたら、と思つて前もつてY校と決めてあつた。

しかし、行きたくないと言つたことが頭からはなれなかつた。

ある日の金曜日の二限(保健)の時間、「学校についての品」が、自分と、前にすわつてゐる山本保の間におこつた。

自分は、母や姉に「こごと」をいわれた「こごと」を話して、保おまえ進学や「こごと」言つたら、保は「おう、そつち」と言つたから、そんなら保と「こごと」の学校いへへげと聞いたたら、「X校へ行くがや、一(自分)は?」と「こごと」は自分に問返してきた。自分は心の中で、進学ならY校へ行きたいと思つていたが、上がるか?落ちるか?と考えるよ不安なので、わしか、わしまだきめてないがや、といちおつちお返事をしておいた。

それから毎週の「こごと」に話は続いた。自分にすれば、母や姉に「こごと」を言わねむねの中、「こごと」は「こごと」になつた「こごと」を、はきたす機会になつてゐた。

二学期が終り、三学期になつた。二学期になると、「こごと」で聞かされた「こごと」が耳の穴を通らなくなつた。そこで金曜日の話もなくなり、自分のY校の「こごと」を保にいつた。

じぎの日から、むやみに学校に行きたくなってきた。やはり
たまったゴミは捨てなければ回転するものも回転しなくなる
と思った。

「この進学にしてもそうだが、やり始めたことを最後までや
りとおす」といふの栄冠をとる事が出来るのではないだ
ろうかと思う。

進学にあたって



一組



新宅美和子

義務教育九年間の制がしかれて、早々二十年はたっている。
その二十年たったこの道、九年の教育を受け終えようとして
いる私達。そして、新しい道を進もうとしている私達が現在「
」にしている。今までの道は、進学コースと、就職コースという、別
れ際まで来ている。「これまで仲よしだった友とも手を振らな
ければいけない」といふふう。とつても淋しい。今、私は進学
の道に突き進む、それを導くために、いかにいかに進むべきか、いかに
心こめていきます。

今口では、進学についていかにいかに意見が出されています。
男性には、いいのいい就職口が与えられたようにいわれて、女
性には、いいのお嫁入り道場のようになっている。そして、男

女共に、我こそあの有名校へと、競争心にあおられ、大変苦勞
しています。

「試験地獄」と世間から言われながらも、まだ地獄の底まで
行くことする人が沢山います。夜遅く、いや徹夜してる人が
おり、顔を言白くし、フツフツしてもまだやっている人もいま
す。どうしてこんなに苦しまなくてはならないのでしょうか。

高校は、お嫁入り口や、就職口を決めている所となり、あの
人はあの高校、この人はこの高校と、人の品位までも決める
所になって来ています。私はいや皆が反対でしょう。「このよう
な物なら、廃止すべきです。人の品位は物事によって決まるも
のではありません。良いお嫁さんになるのは、個人的な人格
を高め個性を伸ばし物事にやっしく接すること、良い就職口
がほしければ、技術を身につけること、最も良いことでは
ないでしょうか。学校出ようとして価値を決める世間が、つ
くづくいやになりました。新聞にも「新しい教育への道」とい
って、意見や、受験生に対する批判などが書かれています。

私いや受験生は、今は冬です。とつても寒い。自然に春は訪
れませんが。「この手で春を引き寄せたいのです。一日一日、
しかし、私の春とつながらついでいひもは切れていってしまうか
ついでいひと苦心惨憺……。昨年から見れば「広き門」
といひようだが、「苦しき門」が一番適切です。

勉強勉強にあげくわていひる日々とついでいひも、勉強勉強と
聞かされた、悩まされた日々です。学校でも勉強、家でも家

族が心を鬼にして、勉強を叫んでいます。孤独な人生、灰色の青春、これでは不良少年が出るのはあたりまえのようです。若いエネルギーを受験などに発散させ、老衰していくのも反対です。そんなにまでして進学しなくては、いけないのでしょうか。能力が他の人より劣っていて、人間味のあるほんとうの良人でも進学することが出来ないかもしれない。そして、高校を出ていないからといって、ほんとうの品位まで買われず失ってしまう人がいるかもしれません。この人達は世間のクスでしようか。そしてまた、入試に失敗すると、どうなるのでしょうか。あつたりめきりめられる問題だろうか。毎年のようにノイローゼで自殺、試験失敗に自殺、と報道されるのを聞きます。「このようでは高校生活も大変悲しいものです。」「これだと昔はどれだけよかったですか。」

今年の内申書を重視すると言われているので、少し安心感を持った人がいるでしょう。それよりも、いっその「ヤ」「ヤ」「ヤ」な門「ヤ」「ヤ」「ヤ」として、軽く入学出来るようにして、後で能力や品格に応じて、教育を受けられるようになる方がいいのかもしれない。という問題が出て来るが、私はただのためだけに苦勞までして進学しようとするのだろうか。自分のため、家族のため、いや他人のためだろうか。両親は自分のためだろうか、今の私にはどうしてもわからない。



受験

二組



南谷真理子

今は受験がまぢかにせまっている。教室では問題集をしている人、いつしようけんめい何かを覚えていく人、ほかの子としゃべっている人、遊んでいる人(今は自由時間)いろいろな人がいる。わたしはどちらかというと遊んでいるほうにはいる。ほかの人の話を聞くと、母は「いちいち勉強しなさい」とか言っている。遊ぶと勉強しようとならないうち母からいわかまいなし。遊ぼうと勉強しようとならないうち母からいわれたことがない。それでどうも「ママ」「ママ」「ママ」って「ママ」らしい。それで母に「なんで勉強せよゆってんわんがや」と聞いたら「かあちゃんが入行したとき、そこのかあちゃんの子供に今は中学二年で勉強せ、勉強せ、宿題したか、な」とものす「くやかましくゆ」とした。それを聞いたらいやな気がした。自分のしたいときにしたほうがむりにおこしけるの、いいと思うし、まり「もそんなにいわれるのがもいやや」と思ってたんもいわんがや」とのことである。「高校おちたらうらぶんで、でもいけばいいがね」というけど、内心は「やっばり上げてるほうの」。「なんだよ」とを口にしたことめあつた。「高校

それまでになるにはがんばらなくてはならない。仕事はつらいだろうが一生けんめい働いて、いい職人になり級をとり、りっぱな人間になるため努力する。

そして母にしんぱいかけずにしたい。それから母をらくさせ親こうこうをしたい。そして立派な社会人、立派な職人になり、社会に役たち、自分自身にも役だつよう努力するつもりだ。

就職が決まって



一組 小西 末男

あと一カ月たらず、いままでですべてきた九年間、長い長いと思っていた九年間も、あと一カ月ほどで終わってしまうのだ。その間になにがめだつことがあつただろうか。

今、思ううかへてみると、小学校へ入学したあの日から、一年、二年と長いような九年間が、あつという間に、あと一カ月ほどになつてしまった。

中学三年の今までは、もう数日しか学校へ通うことができない。就職するのと、もう少し勉強しておけば、良かったなあと思う日がへるかもしれないが、就職するのと勉強する日がなくなつてしまふのが勉強なんかしたくない。

三月に卒業式がある。それがすむと、すぐ就職しなければならぬ。

他の者は、進学して上の学校へ行って自分とは、違う方向へ進んでいく。他の者が進学しても、うらやましいとは思わぬ。就職して社会に出れば、苦しい修行をするようなものだ。就職する所の方は、手職を習うのだが、二習うよりなれうといふようなものだ。

そこで、他の者よりも早く職を覚えなくてはならぬ。今までは親のすねかじりだったのだ。社会に出れば、今までは全然ちがう生活をしていかなければならぬ。それだから早くなれるようにならなければならぬ。

それになんたいなれる、と、いふのは、自分のことを整えなければならぬ。家にあると、我身勝手なふるまいをしてきた。が、就職すると、家にいるような気がしているわけにはいかない。自分のことは自分でしなくてはならぬ。なつてくるので、二日坊主にならないよう気をつけて行かねばと思う。毎日のことだから、たぶん大丈夫だろうと思う。

朝は、早く起き、夜は早く寝る。ううに心がけ、ねぼろをしないように気をつけなければならぬ。

そんなことをしている間にも、一年たつてしまふので、一生懸命働くううになるの、は、二年目か三年目かもしれない。

探りあてた鉱脈(三組)

石森 広
 一つのことを仕始めたら、最後までやっつけてのける、強い意志と強い根性をもちたまえ

内尾 祥映
 高い理想に向かうためのたくましい体力

岡田 泰仕
 時は流れる、どっしりいっしょうと充実した日々をおくろう

窪田 久憲
 不可能を可能にする所に人間の姿があるのだ

倉田 晴好
 山のりこえる気持ちで、がんばろう

小石 正幸
 新しい世界へ倒れても倒れても、自分の力で立ち上がり進んで行きたい。そしてこのどっかい夢を実現したい

小田 繁光
 プラスになることだったら、どんなことでもしよう

界 正治
 小学校の時、先生の言ったことはを思い出す
 「やれば出来るよ」

千田 裕幸
 高い理想で自分の向かう道を進もう

多田 一夫
 人生とは短いものだ。この短い期間を有用なものにいかそう

寺田 正勝
 目の前の道はまがりくねっている。しかしまっすぐに進もう

内藤 秀幸
 自信をもって生きよう

中田 渉一
 努力を重んじる精神を養うことは
 きっと成功する人間になるだろう

中村 建二
 毎日全力をつくそう

成田 幸一
 大自然に向かって進もう

畑 雅克
 世界を一周するような夢をもってがんばろう

半田 隆光
 荒波をのりこえるようなしんけんな気持ちをいつまでも保とう

松本 五雄
 大自然におおきなゆめをもって進もう

本 良一
 なやみがない、それは考えることのできない人間だ

山上 宗明
 これからは、木の根っこのように、自分の道をすすみ
 強く生き抜く時がくるのだ

人間には苦しみが必ずある。苦しみのりにこえて行けば必ず
あとから倍の楽しみがあるであろう。もし苦しみをとけら
れたとしても、あつかうにたおえない苦しみが諸君にせまる
であろう

吉村 照夫

ほがらかに生きぬよう

浅井美代子

なやみをうちあけられる友達を作ろう

上田 一枝

何事をするにも「誠実」に。

奥村真理子

これが人間にとって最もたいせじなことです

尾山真知子

人間は何かをしようとする時、自分をよ／＼見つめて行動する

加藤 正子

いつも心の中の静けさをほほえみを忘れず

あすの希望にむかって生きましよう

杉田 夏代

道徳を守る人になろう

竹内百合子

暖かい日ざしがいつぱい、だが今外はそむくつめたい

辻 一代

自分の選んだ道は自分で進め

花は美しい、自分の命のあるかぎり

中村 幸子

花は人の心に美しさを与える

西田真白美

高い荒波をこえる勇氣と希望を持とう

浜崎美智子

どんな事にもくじけない人間になろう

藤場真理子

なに／＼にもまげず、なに／＼にもくじけず

マイペースで行こう

三宅 道子

自分自身に勝ち、いつも夢と希望をもとう。

宮島美津子

／＼／＼をよ／＼かみしめて、うんとあじわおう

村本 泰子

自分自身が幸福になるためには

自分が努力するほか道はない

本 咲子

四季が変わる／＼／＼人の心もかわる。がしつかり未来をみま
もつて

安田千代子

努力する／＼をやめれば、自分に負けた／＼になる

山内陸奥子

どんな時でも自分の言いたいことを言う



何をするにも精神力、忍耐力が必要です。

クラブ活動、勉強で精神力、忍耐力を養おう

山岸 栄子

何よりも当たり前だけの精神を持つよう

山口真知子

「カイロソびハおき」の精神でくいのない人生をおくろう

山崎 澄江

自分が選んだ道はどこまでもまっすぐ進む

吉本 慶子

平和への願い

いつ果てるとももしれない泥沼の様相を呈してるベトナムの紛場、科学の世界では月へ軟着陸に成功したというのに、人間はどうして手をつないで歩めないのだろうか。今の時代ほど平和を希求しているときは、かつてあっただろうか。……

世界平和の実現を願って

二組



常山 輝夫

今盛んにベトナム戦争をしているし、原水爆の実験も中共がやっているし、冷たい戦争も目に見えて、なくなるおぼろ気な心配もありません。又、軍備を持たない国は一国もありません。みなさんは、こんな世界の状態をどう思っているんですか？しかし、幸いながら、僕達は穏やかな日本に生まれました。いやまでも、しかしそれは人間にとっては残念なことかもしれません。

なすしははせしうじつて、日本に生まれても、世界のいじつにいて、深くききえ、話合ひしうじつが必要なのではないでしうか。今ベトナムで戦争がおこつてゐるのですが、それは千九百一十三年十一月の南ベトナムのクーデターのころから、今まで続けられています。だんだん激しくなつてゐるやうです。ベトナムもアメリカ軍も必死になつて戦つてゐます。又ベトナムに軍事物資を送る国もあるし、南ベトナム政府・アメリカに加つて、兵士を送る国もあり、実際に関係のないうじつに、国々も交つてゐます。中共では最近原爆の実験をやりました。そして大国、ソ連、アメリカ、フランスなどは、だいたい原爆をかかえこんでゐます。またたぐひつゝな世界状態ですね。しかしその反面、原子力平和利用のため、国際連合原子力委員会、ヨーロッパ原子力共同体などが組織されてゐます。日本では憲法に、平和主義を掲げて軍備を持たないといふことになっています。しかし自衛のためたぐひつゝ自衛隊が設けらわれています。

オチで世界の大国はなぜ核兵器を持つのでしうか。アメリカとソ連などは、その数をきそつてゐるに、多く持つととがなばつてゐるといふことでもありませんか。また中共もアメリカ、ソ連においひつゝとつて、実験をしてゐます。まったく理由がわかりません。世界戦争でもおこつてはじめてゐるといふのでしうか。世界中を征服して、自國の支配をいひつゝいひつゝでしうか。世界のあちこちで核兵器拡散防止や、原水禁止

運動をやつてゐます。国連にもやういふ機関はあります。にかかわらず、国連に加盟してゐる国が核兵器をせつてゐるといふことは全くおかしいといふです。

アメリカはベトナム戦争をやつてゐるけど核兵器をつかうていけません。ソ連はつげなるらうかえはよいのに、しかし使用しないといふことは、シモンソンの大統領もやはり人間だからだと思ひます。しかしアメリカの行動には解しかねます。もし平和をねがうならば、あくまで戦力はつかわないはず。それだとは思ひませんか。

又日本は世界一りつぱな憲法を持ち平和主義なので兵器を持たないといふことになつてゐるわけですが、ソ連でしうか。自衛が目的であり戦争をするためのものではないといふことでも、自衛隊が組織されてゐます。一見せしよもつゝやうですが、敵がやつて来た時に戦つたためのものではないといふやうか。やはりそれは戦争と名のつゝなるものになるといふやうか。ソ連の国でも敵が向かつてきたら戦つてしうか。しかしソ連の国の人も平和を願つてゐるでしうか。ソ連ならソ連の世の中から兵器がなくなればよいといふやうですか。ソ連の国も兵器を持たなければいじやありませんか。

皆さんはそういう夢みたいないふをきいてもはじまらないといふのでしうか。しかしソ連ならばほとつていふのでしうか。なぜならソ連でしうか。

世界を平和にするために

一組



北村裕見子

それは国どうしが信じ合わないからだと思います。もしわが国が兵器を捨てたら、あの国にせめられるんではないか。互いにそういって口をきえていればなかなか平和はおとすれないでしょう。冷たい戦争が続くかぎり平和はおとすれないでしょう。

しかし世界の人々が互いに同じことばで話し、お互いを知合えば必ず問題は、だんだんやわらびゆるむことができると思います。

僕達はソ連の国の人々の生活をよく知りません。ソ連の人達の考え方もわかりません。その他たくさん国の人々の生活も。政治家の交歓だけではない。一般国民も他国の人々と交わり接触できれば、どれだけ世界が平和になるかわかりません。もし考え方がちがっていても、話し合い、ゆずり合えば、平和を築いていけることができると思います。しかし今の世界の様子では、そういう前向きな傾向が少ないのが事実です。

ぼく達世界一の憲法を持った国の若者の活躍する番が次にきています。世界の友だちと手を結んで活躍する日が。

戦争という罪をおかしたおとなたちのしなげなければならぬのが、ぼく達にゆめするためには、世界の若者の手を結ばせる手助けだと思います。そしてぼく達若者は世界のいろいろな何億という若者と固く手を結ぶことに努力すべきです。

未来に世界平和の実現を願って努力しましょう。

世界は戦争やテロでいっぱいだ。それは他国と他国の話がまとまらなかったことや、自分の国ではどうしたいのだから他国では、どうしたいと言っているところと争いがはじまるのだ。

今、アメリカとベトナムが戦争をやっている。たくさんの方が出ているのを新聞やテレビでよく見る。どうして戦争をするのだろう。

小さな子供たちや若い人たちが、楽しく暮らすにはどうしたらよいのだろう。大人の人たちが、かたてに戦争をするからといって、もしやういふ言いがないと思えるのには、ちがいない。

小さな子供たちはかわいそうに思う。せうかくせの中に生まれてきたのに、戦争の中で小さな生命が、失うのは、ちよつとかわいそう。世界中の母親の願いは、そこにあると思う。

世界中どこでも見るテロはたいへん、かわがしく暴力が多い

い。それは、値上げの反対がとにかく多い。野菜が高いから低くしてほしいと言っているところが人間の生活に悪くあたえるにちがいない。外国はテロの時建物の前で、すわりこみをしてがんばっている人たちがいる。世界中の少年は非行をしたり、しまいは自殺をする少年がたくさんいる。それは両親は少年によ

くしてあげたり、心の悩みをしつかりときいてあげるのは一番よいのだと思う。そうすると少年の悪い所はよくなると思うのだが。

今では、まだまだ争いをやめている国々を見ると、どうして争いをするのだらうかと考えてしまふ。早く戦いをやめて平和な世界をつくって、皆が仲よく暮らせたらいいのにと思つていても、今やっている戦争は今なお続くだらう。私たちが、戦いをどこにかしやうと思つても、私たちの手にはおえない。それは大人の人々の考えもあるだらう。「さういふ問題は大人にまかせよう。私たちの手にはおえない問題がある。ほかの国ではさういふこともいえないきれない問題があるだらう。たとえば他国と戦いをやめてもさうかは、しあわせがくるにちがいない。私たちの手にはおえなくて他国の人々は手と手をむすんで、しつかりと握つた手を何かで見たら、この人たちにも、しあわせがきたのだなあと思つたらさう。

さういふことを考えてもベトナム、アメリカにはさう平和な国になるのかわからない。

国の偉い人は、個々に話あつたりすれば、おたがいに仲よくなるのだが。自分でさう思つていても、自分でどうしたらよいのかわからない。「さういふ問題は、さうしても偉い科学者に相談してもはつきり答えはでないだらう。国々はたいへんいやなことと争いのきらいなこととは、人間だれもが知つている。

たくさんの人たちが死んでいくのは、だれでもがいやなことだし、世界には人間が少なくなるだらう。

日本は、交通事故や飛行機のついでに、ときには大きな事故がどこかでおきている。さうなるとたくさんの方の死者があると、私たち人間は早く平和で事故のない国にすめたらいいと願う人々は、世界にたくさんいるだらう。エモと戦争がなくなつて平和な世界になるのはいいだらう。

人間が正しい行動で進むのはいいことか。

